

雑誌を読む

1月

森まゆみさん 立花隆さんの「孤独なリーダー」政治屋「小沢一郎」(文藝春秋)が面白かったんですが、...

中西輝政さん 立花論文のように、国内政治を論じる場合は主張を明確に打ち出して問題提起する姿勢が重要で...

橋爪 今回読んだもの多くは小沢さんを悪役にしていて、内容は政治家のくだりだが、いつどこでだれとつづいたという事実関係を、...



左から中西輝政、橋爪大三郎、森まゆみの各氏

日本政治を論じる視点

政治全体が日本の文化性を無視して、そこから脱却しようとしているのかも... 森 政治家になった人を国会立の大学院で再教育する提案もありました...

◆ 私のお勧め 2点 ◆

Table with 2 columns: Author/Topic and Recommendation. Includes entries for 久野収 (エコノミスト) and T.A.M.A.Y.O. (文藝春秋).

◆ 読む・ガイド ◆

Table with 3 columns: Title, Author, and Content/Notes. Includes entries like '孤独なリーダー「政治屋」小沢一郎' and 'カラオケ政治からの脱出'.

自由帳

いじめ対策は学校改革から... 木村氏は、清和事件を「いじめ」とみるのは間違っている...

▼なかにしつるまき 静岡県立天... ▼もり・まゆみ 地域誌編集者... ▼はしづめ・だいさぶろう 東京工...

1995-7-③/18

雑誌を読む

3月

中西輝政さん 震災については、先月の総合雑誌は危機管理や復興問題など直接的な課題を取り上げていたが、今月は日本という国家のあり方や社会の本質など、より広い視野から取り上げたものが多くなっています。しかし、中にはエモーショナルな議論もあり、対談「戦後の敗戦」(Voice)で野坂昭如さんは集団行動の訓練のために徴兵制が必要だと言っています。焼跡を見るたびに大きく針が刺さっているようで、震災後の精神的パンクかもしれないが、均衡を欠いてはならないと思います。

山下悦子さん 比較的若い世代の橋本治さんが「それでもまた日本人は、この揺れる大地を私有しなければならぬのか」(広告批評)で私権の制限を主張しています。危機管理や個人の命を救えなかった国家を批判するのでは大切ですが、強い国家権力に安易にゆだねてしまっているのでしょうか。五十年前とは違って市民社会の成熟があり、きつとした個人が形成されつつあるとはいえ、まだまだ大半の人々は「お上」に頼り、国や会社のために滅私奉公しているのが現状です。

橋爪大三郎さん 橋本さんは「まともな国家」の必要性を主張しています。彼が言う私権の制限とは、壊れかけた家を国がきつめて建て直し「住宅を建てるといっています。私権を制限する」国家が大きな権力を持つことは戦後日本ですとトクパーですが、彼はそれを問い直している。強い機動的な国家をなければ災害の時に弱い者は生きていけないようになってしまっていることを指摘して、ある意味で率直な本音が出ています。

中西「まともな国家」が必要という結論には賛成ですが、国家権力の巨大化は問題がなくて、国家権力の無能だけが問題だというや断定的な言い方が気になる。国家権力というものはチェックを怠れば必ず肥大して、問題を起こす。という原点的思考は忘れるべきでない。確かにシステムを築く必要はあるが、性急なあまり必要なチェックを放棄したら民主主義の

自由帳
先日、アメリカの某誌の女性記者から突然、「田高が死んでいるが、このことについてどう思うか、日本社会への影響は」といったインタビューの申し込みを受けた。私は経済学者ではないし、八八円台を一時はいき記録した異常な円高が今後、どのような形で私達の生活に影響を与えてくるのか、今の時点ではわからないと答え、即、断った。すぐに電話を切るのもつれないと思ひ、数分の間、

理念だけの国家論は危険
アスな話題ばかりだった。感があった。国家について外国語の方が社会の見方が現実的だという気がした。このことは不可避な課題だが、理念や言葉だけが先走るのは危険だという気がする。兵庫県原野民知事や「パイロット自治体」住宅の価格破壊を推進」といった21世紀を意識した復興

「震災後」の国家と社会



中西 輝政さん



山下 悦子さん



橋爪大三郎さん

「市民」という認識をもつことが重要だと思います。個人を最低限守るシステムは市民社会の中で作られるべきです。日本の場合、戦後のファシズムの時代があり、戦後も国家や企業社会が個人を大事にしてこなかった。特にサラリーマンの妻たちはそういう実感を持っています。大震災ではその心づみが見られた気がします。

◆ 私のお勧め 2点 ◆

(注記した以外の月刊誌は4月号)

Table with 3 columns: Author, Title, Content. Includes entries for 橋爪, 中西, and 山下.

◆ 読む・ガイド ◆

Table with 3 columns: Title, Author, Content. Lists various articles and their authors.

1995-7-2/18

雑誌を読む

4月

橋爪大三郎さん オウム真理教をめぐっての事件ではテレビの軽薄な対応が目立ちました。視聴率のことだけを考へていたので、教団幹部の生出演戦略には驚いてしまう。麻原彰晃代表との単独会見スクープが欲しいので、窓口になる幹部との関係を切れない。そこで、本来追及される立場の教団が逆に攻勢に出るかたちになってしまっ

た。中西輝政さん センセーションナルで怪訝な表情を浮かべたのが先行している一方、教団幹部に過度に弁明や正当化の機会を与えている。メディアの基本的あり方から言えば、どちらもあってはならないことです。山下悦子さん アエラ(4/17)の「テレビが負けてオウムが勝った」が印象的でした。「オウムの主張をたれ流すだけのテレビ布教になった」と上川紹子さんがコメントしています。上

田史浩氏や青山吉伸氏が女性に人気があつて、視聴者がそのイメージ、経歴なども含めて魅力を感じてしまつて、という問題もあります。橋爪 報道番組でワイドショーの境界があいまいになってしまったことが問題です。報道は報道としてのスタンスを持ってほしい。教団幹部の言い分を聞きながら、真実がどうかを追及し、視聴者に問いかける必要がある。よかつたのはニュースウィークの一連の特集(4/5など)で、問題の本質を浮き出させるために外国のカルト教団やテロリストについての既存の情報を整理して事件の特色を描いていた。非常に手慣れた報道ぶりです。日本のメディアは毎回一からの勉強で報道機関としての情報の蓄積、整理ができていない。

山下 ニュースウィークの特集はカルト教団の日本比較を試みたり、日本社会に巣食う根源的な問題として分析するなど質の高い内容でした。中西 特異で重大な事件ですが、微罪適用と別件逮捕が発せられている捜査について、特に活字メディアがきちんとした評価をしなければならぬ。やむをえない面があるのかどうか、法

◆ 私のお勧め 2点 ◆

(注記以外の月刊誌はすべて5月号)

橋爪	①むかし過激派いまオカルト ②「戦慄のカルト教団」他日本関係一連の特集	小田晋 新潮45 ニュースウィーク 4/5、12、19、26	①「自由と人権」をお守りする権利を日本に求めた。②「ササキ」が官憲支配の日本社会を直したもうささきを明らかにする
中西	①文明の終焉「原理主義」との闘いの始まり ②宗教と暴力	テッサ・モーリス -鈴木 世界 西部選 発言者	①欧米の文化の中にも「共の」との理想があることを示す。②社会の宗教を考へるとき不可欠の視点を提示する
山下	①特集「ニッポン大蔵省の落日」 ②希望的視測は捨てるべきだ	ウォルフレン他 エコノミスト4/4 岩井克人 Ronza	①対談「大臣は官僚の首を切れるか」が自主。痛烈な批判と真実が満載。②「発露」著しいアジアの今後を語る。斬新な環境問題を語る

◆ 読む・ガイド ◆

開発と終末論——ポスト・パブル日本の二つの極	高木保 中央公論	戦後の発展神話とそれを支えた世界観、人生観の崩壊
サリン事件——閉鎖集団の「化学テロ」	野田正彰 潮	この社会が社会矛盾と戦う理想を取り戻すしかない
オウム真理教 脱走者の手記	江川紹子 文藝春秋	信者たちは物理的にも精神的にも縛り付けられている
ドキュメント強制捜査	麻生幾 文藝春秋	日本治安史上に残る大戦争はどのように準備されたか
「邪教の救世主・麻原彰晃」を創ったのは誰だ!	溝口敦也 サピオ4/27	カルト教団の運命は指導者の描く幻想によって決まる
大蔵官僚をどうしたらいいか	斎藤精一郎 諸君!	「司令塔の空洞化」克服へ健全な歴史観、倫理観を
我がく戦い、そしてかく敗れたり	岩國哲人 新潮45	無責任な過激発言をしていたら支持率は上がったかも
東京都知事に官僚OBは要らない	新藤宗幸 Ronza	必要なのは東京の成長に歯止めをかける分権改革だ
パブル円高 解消のシナリオ	伊藤元重 中央公論	ドル資産への投資により円高修正の可能性が出てくる
全予測1ドル80円時代の日本経済 産業別生き残り戦略	水谷研治 宝石	円高に対して企業はどのように対処したらいいのか
ドル危機の本質	長谷川慶太郎 Voice	円高は日本経済の必然。通貨危機もまだしばらく続く
もう国には頼まない 「円高・株安」からの脱出	田勢康弘他 日経ビジネス4/10	我々の心に内在する「お上頼み」意識からの脱却を
いじめられた子供たちの遺書から	岸沢俊介 諸君!	追い詰められた子らの一言から見る「集団幻想の病」
ひとは「いじめ」によっても成長する	諏訪哲二 諸君30	文部省「いじめ報告」にみる牧歌的、反教育的な世界
高城流マルチメディア入門	高城剛 広告批評4月号	もう一回、家族団らんのお茶の間の時間が来ると思う

メディアの中の「オウム」



橋爪大三郎さん



中西輝政さん



山下悦子さん

書いた一九九〇年当時とどう見えたかは仕方なかったとして、宗教記者ならそこに底深く進行していたものに気づいてほしかったというのが浅見さんの主張です。しかし、日本では宗教という学問は欧米に比べて薄いです。日本社会が宗教を正面から文化の一部として受け止め、アカデミズムの中で位置付けてこなかったためです。従って、キリスト教、仏教、新興宗教などについて徹底的な解説ができる人が少ない。結局、ニューアカデミズム

自由帳
東京で青島幸男氏、大阪で横山ノック氏が知事に当選、「無党派勝利」の見出しが躍った。石原氏を都知事に推した連立与党が、ほを向かれたわけだが、本当の敗者は候補者を立て(られ)なかった新進党だ(と願う)。
青島氏は選挙期間中、書籍を本を讀むという「クリン」な運動でアピールした以外、とりたてて政策や実績はない。有権者は「談ち破った」という図式である。だが、そんな実体などどうになったので腹を立

新進党・党づくりの誤り
これまで「支持政党なし」「浮動票」などと軽く見られてきた層が、「無党派」という立派な実体で、あるかのように言われ始め、無党派が既成政党を打ち破ったという図式である。だが、そんな実体などどうになったので腹を立

をめぐらさせることもありうる。今後、似たようなことを繰り返さないために、この社会におけるさまざまな矛盾の解決に取り組む「理想」が重要だと思

社会的無宗教性の中で、宗教という位置を与え、どう共存していくか、成熟した態度が必要だと強調している。水原の論議文だと思えます。
橋爪 閉鎖集団の「化学テロ」(潮)は、放火も化学テロも弱者の犯罪である。分析して説得力がある。宗教が偏見を被れば、自分の必然から宗教にかかわっていかねばいけない人は、深い疎外感を抱くことになる。宗教に対する無理解が逆に彼らの終末幻想

雑誌を読む

5月

橋爪大三郎さん オウム問題に関し...



右から橋爪大三郎さん、山下悦子さん、中西輝政さん

オウム事件と日本社会

オウム事件に目を奪われ... 「日米」悲観論の克服を... 橋爪大三郎さん...

◆ 私のお勧め 2点 ◆

(注記した以外の月刊誌はすべて6月号)

Table with 3 columns: Author, Title, and Recommendation. Includes entries for 橋爪, 中西, and 山下.

◆ 読む・ガイド ◆

Table with 3 columns: Title, Author, and Summary. Lists various books and articles related to the Aum Shinrikyo case.

橋爪 日本は国際的イメージは相違... 中西 科学的思想を根本から揺るが...

雑誌を読む

7月

中西輝政さん 戦後五十年の国会決...

橋爪大三郎さん 総合雑誌のそれな...

国会決議と戦争責任論



中西 輝政さん



橋爪大三郎さん



山下 悦子さん

中西輝政さん 戦後五十年の国会決...

あけられていくかを十分に議論して...

山下 新しい世代は過去の歴史を客...

◆ 私のお勧め 2点 ◆

(注記した以外の月刊誌はすべて8月号)

Table with 3 columns: Author, Title, and Recommendation. Includes entries for 橋爪, 中西, and 山下.

◆ 読む・ガイド ◆

Table with 3 columns: Author, Title, and Recommendation. Includes entries for 北岡伸一, 加藤典洋, 宮崎哲弥, etc.

自由帳
ある日はディベート、あがりてホクホク顔の者。決...

グループ・ワーク

プに分かれてがやがや、まじいか否か、新聞の社説や...

雑誌を読む

8月

中西輝政さん フランス、中国の核実験に対する反対運動が盛り上がりつつあります。NPT(核拡散防止条約)体制の無期限延長決定の直後であるというところだけでなく、冷戦構造が本格的に終わっているという背景があります。そして東欧問題の視点も強いのが特徴です。山本俊明さんの「仏核実験への警戒で反核運動盛り上がる南太平洋」(世界週報8/22・29)は、ベトナム反戦以来の運動の盛り上がりも指摘しています。今回、米国の核実験全面禁止提案を行う展開になりましたが、なぜ反核運動がこれだけ大きく国際政治を動かすに至ったかを、日本ではまだつかみきれないようです。

橋爪大三郎さん 大きな変化はやはり冷戦が終わったことにあるのかもしれない。米ソが核兵器を持って対峙している間は、どの側も核兵器に対する最低限の国民的支持が必要でした。マイナスイオンにある程度はかき回し、核抑止力に対する信仰を持たせる必要があった。しかし冷戦が終わると、核兵器を効率的に管理し縮小していくことが次の課題になる。核兵器に対する過信は逆に危険をはらむようになり、かつては冷戦体制を突き崩す危険な要素だった反核意識が、いまや国際秩序を維持するために利用価値のあるものになってきたのではないだろうか。

山下悦子さん 核や原爆の問題は道徳的な問題としてよりは政治的問題として語られてしまっています。山本さんが指摘するように、冷戦が終わって米国の気がねなく反核を叫ぶ環境になったという政治的的背景が大きいようです。この論文では環境問題の要素の大きさが書かれていて、これが二十一世紀への課題になるという点はなるほどと思えました。掲載されている世界の核実験の地図を見て、その多さに驚きました。これまで南太平洋諸国は反核運動において抜き役だったのが、今は台風の目になったことも、冷戦後の新しい動きかとも思えます。

◆ 私のお勧め 2点 ◆

(注記した以外の月刊誌はすべて9月号)

橋爪	①特集・その後のオウム真理教 ②「安全保障不況」の日本	宝島30 伊丹敏之 中央公論	①宗教学者の思想責任、信者・元信者の人生ほか、②不構まじめな総括は総合安全保障の根本原因は透明なためあり方が不透明なため
中西	①始動したアジア発展・安定化モデル ②左翼は消え保守は死んだ	小島明 浅田彰・福田和也 中央公論 Voice	①アジアの発展が秩序の安定につながる点を論証②共に起こった左翼の死と共に、戦後保守も消えいく運命にあることを教える
山下	①エイズ宣言ではじまったわが魂の旅 ②元従軍慰安婦の心の叫びが聞こえないか	佐伯宣子 辺見庸・金福善・李容洙 中央公論 Ronza	①エイズで逝った女性精神科医の自己への冷静な記録が感動的②「従軍慰安婦」という言葉自体がおかしいと言う彼女らの指摘は鋭い

◆ 読む・ガイド ◆

アメリカは原爆をこう教えている	中野嘉子 諸君!	米国の「考えさせる」教育法は日本とあまりに対照的
アメリカはなぜヒロシマを恐れるのか?	越智道雄 宝島30	被爆が神聖化されヒロシマは日本の核兵器になった
被爆50年特別企画・核の物語—若い人々のために	高木仁三郎他 世界	マンハッタン計画から現在まで、核による災厄は続く
仏核実験への警戒で反核運動盛り上がる南太平洋	山本俊明 世界週報8/22・29	南太平洋の反核運動は長い歴史がある必然的なもの
だれが原爆攻撃を命令・指揮したか	河内明 正論	「原爆使用は戦争の早期終結のため」との説は大欺瞞
特集 核と人権	今井隆吉他 軍縮問題資料	国際政治の現実の中で核の廃絶に向けた手順を考える
グローブズ將軍と原爆投下	S・ゴールドバーグ 世界8月号	軍事的に不要だった原爆投下を実行させたのはなぜか
「ままと遊び」の政治は終わった	佐々木毅 THIS IS 読売	「人柄超然内閣」村山政権の存続は時間の空費である
日本政治に新しい潮流を見た	五百旗頭真 潮	ロマンを伴った構想力を持つ二大政党制を期待する
消費資本主義と日本の政治	吉本隆明・芹沢俊介 諸君!	中継ぎとしてありえた小沢一郎的な政治は飛ばされた
社会党は解散しリーダーは引退せよ	山口二郎 Ronza	冷戦後、社会党は自らの存在意義を証明できなかった
特集 戦後広告50年史	広告批評8・9月号	時代を映す広告の数々で戦後を考え、楽しんでみよう
戦後世代の戦後思想家論	松原隆一郎他 正論	丸山眞男、たけし、三島由紀夫ら5人の思想家を論ず
男には深遠な謎「女と女性誌」	稲葉真弓 新潮45	時代と時代の女たちの性を映し出した女性誌の歴史
「ゴーマニズム宣言」突然連載中止の真相	小林よしのり 創	SPA!の人気マンガが連載中止になったのはなぜか

中・仏核実験と被爆50年



中西 輝政さん



橋爪大三郎さん



山下 悦子さん

ルギーについても同様です。橋爪 だが、吉田康彦さんが「核廃絶は『夢の夢』か」(軍縮問題資料)で指摘しているように、原爆がある限りいつまで軍事利用の可能性があり、いつかアリスは押さえておく必要がある。その上で、核兵器と核エネルギーは切り離して考える。

中西 米国では世代が若くなるほど核に対する意識が変化が見られ、核の平和利用についても忌避する意識が強まっています。これは核エネルギーへの

なせヒロシマを恐れるのか? (宝島30)が面白い視点を示しています。無敵の最終兵器を手に入れたアメリカが、同時にそれを使えなくなり、全能感と無能感にでき裂かれた。道徳面を不問に付したまま原爆を使ってしまったことに負い目を持ったという。一方、日本の場合は、唯一の被爆国としての被爆体験をいわば神聖化し、戦争の加害責任を軽減しにしてしまふ被害者意識にもついで戦争総括を行った。そこ

指摘していましたが、日本人はいったん意識の変化が始まるのが大変早いので、考え方を鍛えておかないと無謀な核武装論が台頭する可能性もある。山下 日本では歴史教育と一言でも受験勉強が中心なので、十分に鍛えられていないですね。ニューズウィーク(7・26)の特集「ヒロシマ94」(5・8・6)ではそれなりの検証があったと思いますが、日本のマスコミでは八月になると毎年原爆の話が載るの、あまりきちんとした分析がなされ

▽なかにならぬまま 京都大学 教授(国際政治)マはしつめ・たいさぶろう 東京工業大学教授(社会学)▽ やました・えいこ 女性史研究者

「歴史」から逃れられるのか、という深い問いを突きつける。『戦争』の「歴史」とは、すでに五十年前に起こったことを、どう考え、どう評価するのか、というような生易しい意味ではない。このようなギリギリの現実を見つめ、過去の歴史を正しく見ることのできないのである。「過去に目を向ける者は現在を見失う」とは古い古き表現だが、今多量の日本人はむしろ現在を真剣に考え悩まないがゆえに、歴史からも目をそらすことになっているのではないか。

自由帳

八月は日本人にとって、どうしても「歴史の回想」という儀式的季節になってしまふ。しかも、近年は若い人への歴史教育の回帰を続けてきたため、「風化」する歴史「がさらに進んでいる。しかし世界には今、「回帰する歴史」の渦がある。ちびちび見始めているのである。

戦後五十年を迎えたこの八月を待っていたかのように、クロアチア軍は突如、大規模な進軍を開始し、ボスニアの行方考える絶好の機会

連軍を駆逐して、広大な地域からセルビア人住民を「民族浄化」し軍事占領を達成した。これによって、悪役のセルビア人勢力を抑え込み、ボスニア紛争の解決に主導権がとれる、と決意を固めた。この決意を深めるために、アメリカとドイツは、この軍事侵攻を支持し、他方、ロシアと英・仏は反対の立場を取っている。「民族紛争の複雑さ」とか、「遠くからさきやうり方でも進もう」として、このバルカン半島の歴史から目をそらすのは、歴史と世界の行方考える絶好の機会

「回帰する歴史」と現在

軍事侵攻を支持し、他方、ロシアと英・仏は反対の立場を取っている。「民族紛争の複雑さ」とか、「遠くからさきやうり方でも進もう」として、このバルカン半島の歴史から目をそらすのは、歴史と世界の行方考える絶好の機会

で、中野さんの原爆教育の議論につながりますが、日本では投下の瞬間から話が始まるのに対し、米国ではむしろ投下に至るまでのプロセスを勉強する。大統領が持っていた情報など当時の状況を踏まえながら、自分の考えに責任を持った健全な核に対する態度を育てていこうとする。やみくもに核兵器反対という日本の教育では、考え方が鍛えられないでしょう。越智さんが

米国の原爆投下についての歴史の書き換えを試みる人が増えています。ロンドン・エコノミスト(Economist)の「原爆の罪と恥」と題する社説で、女性今になって急に旧連合国世論が原爆投下を反省しているのかわからない、と驚きをもって論じていますが、この変化の背景には人間の倫理観の歴史的な変化があるのかもしれない。

橋爪 日本でも、原爆の最初の犠牲になり無実の人々が殺されたという、反核意識の神聖な意味合いが、米国のリアリズムと並行して除去されていくでしょう。議論なしに何となく国民防衛のコンセンサスがあてられている時代は終わりに、ここ数年のうちに議論は分裂していくのではないだろうか。

雑誌を読む

9月

中西輝政さん 自民党総裁選を受け政局流動化の兆しが出ていますが、次の総選挙で自民・新進いずれも過半数を占められない見通しで、第三党問題に注目が集まっています。第三党論には二つの側面があると思います。一つは戦後の保守・革新という構造が日本社会では終わり切っていないこと、す。表面的な動きは保守による二大政党内に進んでいるように見えますが、また永田町でも国民レベルでも全体的な政治意識として保守・革新の二分法が終わっていない。二番目は冷戦後、経済政策のパラダイムが変化しましたが、市場原理や自己責任などの経済原理はすくなくあきらめられない部分がある。これが二つの側面にあるというところ。第三は蒲島郁夫さんが「保・保連合」のシナリオ(Ronza)で指摘していた二大政党内で翼賛制に転化するところへの危機感です。これらを含めて第三問題は日本の政治の意外に大きな焦点になり得ると思います。

橋爪大三郎さん 社会党の新党構想には二つの方向性がある。あいまのまま進んでいます。自民党の総裁選も運動しているようですが、この関係も整理がつかない。一方、国民の方は大きく無党派に傾いていて、それが都知事選、大阪府知事選の結果にあらわれ、次の参院選では新進党が躍進するといふ流れになった。今はそれを踏まえて次の総選挙をどう戦うかという所に来ている。この点で私が一番脱力があると思ったのが、伊藤昌哉さんの「自民党・橋本総裁の超危険度」(宝石)でした。橋本総裁になれば自民党は社会党を切り捨てて新進党の一部と保連合を組む、その結果、創価学会の独裁体制ができるという分析です。結論は賛成できませんが、分析のプロセスに説得力を感じました。

山下悦子さん 蒲島さんの言う二大政党内の落とし穴、長期的には自民党と新進党の政策が同じようなものになって翼賛体制になる可能性があるという指摘はその通りだと思います。ただ、翼賛体制と言っても戦前とは違って、国民は情報も持っている意識も違っ

「第二極」と政治の行方



中西 輝政さん



橋爪大三郎さん



山下 悦子さん

満州(現中国東北部)からの引き揚げて、高校を卒業するまで引き揚�者の都営アパートに住んでいた。そこは決して恵まれない方々が住んでいた。各戸には赤旗が聖教新聞が入っていた。生活のために政治を必要とするグループは日本の中に確実にいる。だが、それに心算していたのは旧公明党と共産党だけではないかというのです。それに対して社会党の今度の新党構想はまったく違ふ。保守二党と結び付けて政権を担おうというのが先

で、政策体系によって政党内けりをしようというのではない。「市民」や「生活」というのは後知恵です。政党内けり過半数を取って政権を担おうとするべきで、最初から第二極などというのとはちがいません。

中西 同じ特集の岡沢啓美さんの「新党はなぜ「市民」なのか」はスウェーデンの社民主義を踏まえた議論

橋爪 ポイントは政党内部でどれだけ政策提言能力、問題解決能力を発揮できるかです。高齢者と勤労者の関係や男性と女性の間、地域の格差などさまざまな深刻で微調整が必要な問題が多いのですが、責任を持って問題解決に取り組む党が少なくも二つあれば、それでいい。A党とB党は保守党だからダメで、第三党が生活者の味方だからいいという発想では政治の課題に心えられない。そこで、自民党の総裁選の話につながりますが、赤坂太郎さんの「河野再選断念の大失態」(文藝春秋)、保志一徹さんの「自民党橋本総裁でどうなる」(諸君!)が指摘するように、河野さんが昔の派閥連合で勝とうとしたのに対し、橋本さんは派閥を超えた有力議員の横のネットワークで勝とうとした。それは小選挙区

▼なかにい・てるまき 京都大学教授(国際政治)▼はしづめ・だいさぶろう 東京工業大学教授(社会学)▼やました・えいこ 女性史研究者

◆ 私のお勧め 2点 ◆

(月刊誌はすべて10月号)

橋爪	①「歴史の終わり」の後の新世界地図 ②「アジア」を再考する	F・フクヤマ 中央公論 伊藤憲一 諸君!	①中国経済発展の行方は信頼の基礎である社会資本のあり方が鍵②中国を軸にする21世紀アジアの安定には米国のプレゼンスが不可欠
中西	①外交交渉とアニミズム ②迷走するアメリカの世界戦略	上野景文 諸君! 松村昌廣 THIS IS 読売	①広い視野から「日本の特殊」の意外な普遍性に気付かせる②後半やや荒削りだが、世界を見る冷戦後の米国の視点を的確にとらえる
山下	①特集・インターネットで遊ぼう ②いまNPOに注目!	ニュースウィーク 9/20 堀田力、金子都容 他 経済セミナー	①書店で売り切れ続出。インターネットはもはや、おたくだけのものではない! ②ボランティア、非営利組織の可能性を学問的に追究

◆ 読む・ガイド ◆

特集・第三極の研究—社会主義から「社会」主義へ	高木郁朗、岡沢啓美 他 Ronza	多様な国民の意思を反映させる政党内けりが必要
橋本龍太郎と橋本龍伍	依孝太郎 中央公論	大人の力量を持つ「自民党最後の切り札」の出自は
自民党・橋本総裁の超危険度	伊藤昌哉 宝石	橋本・小沢・旧公明党による保・保連合が一番危険
解党—社さ第三極づくりの成算	大下英治 潮	社会党、さきがけは解党に向けて苦難の迷走を続ける
わが政権構想	橋本龍太郎 文藝春秋	過半数をもらえない自民党の現状を厳しく認識したい
「団塊高齢化」の恐怖2007年に備えよ	小川直宏 サンサーラ	団塊世代が選層を迎えるまでに備えを急ぐ必要がある
われわれは情報難民なのか	柴山哲也 諸君!	「スクープ」の洪水の中で日本人は情報難民化する
日本外交のリストラを!	古森義久 正論	適材適所を無視した時代遅れの大使人事が外交の障害
マゾヒズム不況からの脱出	神原英資 発言者	自縄自縛的な誤った認識が日本経済を悪化させた元凶
核廃絶への二つの道	坂本義和 世界	核戦争反対から核兵器反対へ、反核の意味が変わった
エイリアンと体罰教師	瀧美京子 宝島30	減刑嘆願署名、被害者家族へのいやがらせの背景は?
清輝君「いじめ自殺」の決算	小林篤 現代	学校の悲劇に関係者はどのように感じ行動したか
序列と格差の前近代を壊せ	西尾幹二 THIS IS 読売	今こそ既成の序列と格差を壊す学校の自由競争が必要
オウム真理教 天皇家暗殺計画の衝撃	中徹 文藝春秋	1993年の皇太子ご結婚の日にあったクーデター計画
宗教と犯罪の経済学	竹内靖雄 Voice	保護と規制をはずし宗教をビジネスとして成熟させる

自由帳

北京で開催された国連世界女性会議が十五日に幕を閉じた。日本からも五千人以上が参加したといわれるが、北京政府の非政府組織(NGO)への抑圧的な姿勢、会場の不備や不平等な、悪い話が多々出てくるばかりで、今ひとつ盛り上がり欠けたように思う。テレビも各局の看板女性アナを北京入りさせるなど、当初は話題づくりに懸命だったがうだが、坂本弁護士一家の遺体発見という一大ニュースに注目が集まり、

色あせてしまったように見えたり。奇麗かつ理解不能な存在であるらしい。雑誌でも、二週にわたって大きく取り上げたのは、「ニューズウィーク」日本版(8/30、9/20)から「多様性」を認めるか否かが争点だった行動綱領も、宗教的、民族的、社会的な相違、多様性を認める方向性で採択され、近代化II面に増えたら、中国は永遠に落ちた状態になる」(「エコノミスト」9/26)と反撃するなど、中国の姿勢はなかなか強気だ。核実験反対運動も、核保有国であるアメリカやその傘下にある日本に資格はあるのかといわれてしまっただけで、「女性」ということだけで「世界はひとつにはなかなかならないうことを示した女性会議であった。(山下 悦子)

中国は、奇麗かつ理解不能な存在であるらしい。雑誌でも、二週にわたって大きく取り上げたのは、「ニューズウィーク」日本版(8/30、9/20)から「多様性」を認めるか否かが争点だった行動綱領も、宗教的、民族的、社会的な相違、多様性を認める方向性で採択され、近代化II面に増えたら、中国は永遠に落ちた状態になる」(「エコノミスト」9/26)と反撃するなど、中国の姿勢はなかなか強気だ。核実験反対運動も、核保有国であるアメリカやその傘下にある日本に資格はあるのかといわれてしまっただけで、「女性」ということだけで「世界はひとつにはなかなかならないうことを示した女性会議であった。(山下 悦子)

雑誌を読む

11月

山下悦子さん 沖縄の少女暴行事件について、沖縄出身の与那原さんが「ひめゆりの物語はもういらぬ」(宝島30)を書いています。ヤマト(本誌)の沖縄への感情を沖縄の本土へのルサンチマン(怨念)をともに批判して、沖縄人は沖縄人自身の物語を紡ぐべきだと言っています。新しい時代の視座として印象的でした。

中西輝政さん 鎌田慧さんの「沖縄」に生きる人々の怒り(潮)は、沖縄を犠牲にして達成された戦後日本の繁栄を指摘しています。冷戦が終わって日米安保見直しや安保再定義が論議される一方、時代が変わっても変わらないものがあることを忘れていた。日米地位協定について、岡崎久彦さんはこれを交えた日米関係に危機が起きていると言います。「安保廃棄は日本を滅ぼす」サンサーラ。しかし、なぜ交えられないのか、という議論を筆者は知りたかったです。地位協定や沖縄への基地集積の問題と今回の少女暴行事件はやはり内在的に結びついていて、鎌田さんのルポが伝える人間の気持ちは冷戦後の時代、重要性を増しています。

我が事としての安保



山下悦子さん



中西輝政さん



橋川大三郎さん

橋川大三郎さん 少女暴行事件は米兵による一刑事事件ですから、その問題として解決すればいい。岡崎さんも司法警察問題と防衛問題を混同してはならないと指摘しています。しかし、そうならないのが沖縄の難しさ。『世界』の特集の中の沖縄県知事大田昌秀さんのインタビューを読んで、それを実感しました。安保について地道な取り組みを続けてきて、いまでも苦澁に満ちた立場にいる大田さんは、この事件を当然安保の問題としてとらえるべきだと答えています。

てきたのであって、感情のコントロールが大切なと強調していますが、これは大事なポイントです。ただ、実際には難しいことだとも思いました。山下「宝島30」の島津友美さんのリポート「米軍とレイプ」が在日米軍の性犯罪率の異常な高さが大きな問題と指摘しています。これはアメリカの社会そのものがかかえ問題でもあります。安保の問題と切り離してこの点を考えることが重要だと思います。橋川 安保見直し論では、軍縮・基

は日本人の感情論が爆発して日本は核武装するだろうという内容です。一方外交問題のフロアである浅井さんと岡本さんは日本が核武装するなんて絶対ありえないという議論です。中西 冷戦後の「敵を失った同盟」は長期的には存在が問われます。短期的には新しい敵を見つけたら、このことがあるわけですが、木村英雄さんのように、そこで「中国」と素直にボーンと出している人がいる。「中国の脅威」をうたうことは確かに当面日米安

日米安保条約の意味を評価しています。こういう議論は国民感情には受け入れやすいのではないのでしょうか。中西 今回の議論を通じて見えてきた日本の日米安保支持勢力の変化は予想外でした。先の世論調査の結果もそうですが、この数年の間に日本人の底流でアメリカに対する感情の変化が生じていたように思います。本間長世さんの「知識人にみる『嫌米』の系譜」(Ronza)は近年の日本の知識人にみられる嫌米の傾向を指摘していま

すが、私は湾岸戦争の影響が大きかったと思う。そこに日米経済摩擦などが重なってアメリカへのやりきれない思いがたいて積まっていたのだと思います。橋川 アメリカとの同盟は戦勝国に対する敗戦国の独立の条件だったわけです。日本人が主体的に選択したものではありません。だから、日本が経済的に強大になった時点で、米軍基地が質的変化するべきだった。本来、同盟の質が変化するに当たって、米軍基地が沖縄に集中している現実を両国関係が更改されていない状況の象徴です。日本が日米同盟を選ぶという決断をするなら、基地を本土に適正に再配置するべきを改めて考え直すべきです。そういうことを議論していくことが日米安保の再定義だと思います。山下 知識人の嫌米意識といっても、たまたま女性解放の面でもアメリカ的な文化や生活は目標だったし、あそこがたまたまわけてから、ちょっと違う気もするのですが、中西 安保があろうがなからうが、日本にとってアメリカは太平洋をはさんだ重要な隣国なのです。橋川 確かに日本は最も重要な隣国同士で、だからこそ安保条約という枠組みがある。両国関係のすべてを安保に託するのは論理の逆立ちです。

◆ 私のお勧め 2点 ◆

(注記した以外の月刊誌はすべて12月号)

山下	①麻原彰晃・出生の謎 ②住友・大和と「超」金融再編全予測	中島渉 宝島30 エコノミスト 11/21	①三重苦の真相究明。韓国まで調査に行ったのは立派 ②大和銀行事件はオウム以上の大問題という気分
中西	①座談会・アジア文明のリンクージ ②「水河期」に入った日露関係	中嶋嶺雄、渡辺利夫他 世界 Voice	①アジアの普遍性と多様性をめぐる本格的討論 ②ロシアへの無関心が将来の禍根にならぬために
橋川	①日米安保は永遠ならず ②野茂英雄とアメリカ人	中西輝政 Voice D・ハルバースタム 現代	①日本人は感情をコントロールし、戦略的奥手案を ②アメリカ人は外国人の人間が活躍すると幸福になる

◆ 読む・ガイド ◆

ひめゆりの物語はもういない	与那原恵 宝島30	本土にはできない発想にもとづく沖縄人自身の物語を
米軍は撤退し、日本の核武装が始まる	副島隆彦 宝島30	日本人は国際政治の「大きな現実」を見つめるべきだ
「沖縄」に生きる人々の怒り	鎌田慧 潮	沖縄の怒りは日本政府の無責任無策に向けられている
安保廃棄は日本を滅ぼす	岡崎久彦 サンサーラ	日米同盟さえガッチリしていればアジアは安定する
横須賀から見た沖縄少女暴行事件	木村英雄 中央公論	横須賀住民の反基地闘争はない。政治の力こそ重要だ
安保 やめるか残すか	浅井基文、岡本行夫 Ronza	ともに元外交官。安保再定義の必要性では一致するが
知識人にみる「嫌米」の系譜	本間長世 Ronza	浅薄なアメリカ理解が広がる今日は「日本の禍機」か
「安保の呪縛」を葬る時がきた	石川好、寺島実郎 現代	いまこそ逃げることなく勇氣をもって安保の議論を
古い友への手紙	都留重人 世界	日米安保見直しは相互信頼の世界実現への重要な一歩
基地沖縄と日本人	平田綾子 This is 読売	地元紙記者が伝える沖縄県民の積み重なった不満とは
わが家で楽しくコンピュータ	ニュースウィーク 11/8	難しそうと思っている人へのゼロから始めるガイド
インターネット・ビジネスの全て	週刊東洋経済 11/11	電子マネー、銀行不要論など最新線をレポートする
「情報通信後進国」からの脱出宣言	鈴木興太郎、南部鶴彦他 中央公論	制度改革、市内電話市場の徹底した自由化などを提言
特集・半導体産業の興亡	井場浩之他 エコノミスト10/31	マルチメディアブームで沸く業界。日本はどうなるか
対談・パイオホラーに映る日本	養老孟司、米本昌平 広告批評11月	解剖学者と科学史家。2人にはなぜ何が映っている？

自由帳

大学の秋は忙しい。その忙しさの中で、何とかがやりくりをつけて、トルコへ出かけてきた。十月にインドネシア、十一月にトルコ、いずれも公的な所用もあつたのだが、この機会に是非、この両国を見ておきたいという関心も大きかったからである。東西数千キロをへたてて位置する両国だが、ともにイスラム圏に属しつつも、それぞれ独自のやり方で世界の近代化に取り組んできた。また、この何十年かの間

冷戦構造の中で、それぞれの「安定勢力」としての重要な役割を演じてきた点も共通している。周知の通り、インドネシアは東アジア一円の成長の大波に乗りこめ、まざまざと発展を続けているが、一人当たりGDPは、成長そのものの

の大きな「岐路」にさしかかっている、という点での共通性かもしれない。インドネシアは急速な成長が社に政治面に及ぼすインパクトをどう受け止めるか、育て始めた新しい中産階級の意識が、成長そのものの

「我」は我々は東方をめざすまでではないのか」という古い血が騒ぎ始めているかに見える。しかし、今回の訪問を通じて感じたのは、西国とも今や「大いなるブランチマンチズム」という、したたかな、そしておそろしく二十一世紀的なゆきを得てつつあるのではないのか、ということであつた。「安定も民主花も」「東も西も」「いつか」「あれかこれか」の二十世紀的な古い概念と情念の拘束をこえて、極端な「新しい」をこ取り「めめめ」、大いなる実験が始まったように見えるのである。(中西輝政)

「岐路」に立つ二つの国

NTTやゆくとつややく二千億の手が届くかどうか、とつとつとで、二千億を破って進むとするのか、めざすトルコと、大さっぱにはさして違わない。しかしいま重要なことが隠れた形ではあるが、それが変わって、長年夢見てきた「欧州の一員」としての両国が、それぞれいつ目標が揺らぎ始めた。

原動力となった開発主義的権威主義と「ななき」を破って進むとするのか、トルコの「岐路」はもつと端的なものである。冷戦という実験が始まったように見えるのである。

保の活力を増すことにはなるでしょうが、同盟の本来の目的である安全保障にとつて結局マイナスだと思ふ。中嶋嶺雄さんは今世紀中にも中国が民主花を指摘しています。「米中新冷戦」の時代「Voice」。山下 岡本さんは中国が攻めてくると思われないが、安全保障はつまり保険なのだからと言って、中国に対する

1995-7-13/18

原爆展示について

中西 アメリカの Smithsonian 博物館の原爆投下の展示についての議論がある一方で、原爆のキノコ雲をデザインした切手の問題が話題になりました。「世界」の袖井林二郎さんの論文(原爆投下の歴史と政治)が二つの問題の違いをよく整理して、原爆展示についても米国内の議論の具体的な経過をくわしく紹介しています。日本での議論はこういうことが伝えられた瞬間に感情的になってしまふ面がある。データを伴ったこうしたアプローチは重要だと思います。

森 私も袖井さんの論文は一般的なアメリカ人にとって原爆投下がどう受けとめられているかについて、説得的に書かれていると思います。空軍協会や在米在郷軍人協会といったロビイスト集団がいまだに力を持っていることもよく分かりました。バースタインさんの「フォリンアフエアーズ」の論文が「中央公論」に訳載されていて(検証・原爆投下決定までの三百日)、大統領が実際に原爆を投下する前に、日本から視察団を招き原爆の威力を見せて愕然

に使ったどうか考えたことなど、初めて知ることが多かった。バースタインさん自身は原爆が戦争終結を早めたとの考え方には懐疑的です。中西 冷戦に関する拘束が解けたいま、第二次大戦がアメリカ人にとって善悪で善悪戦争であったという認識を維持しなければならぬという現代のアメリカ人の強迫的な意識が、この問題の背景にある。逆に言う、私たちが側にもそういう問題があると思う。入江昭さんの「日本とアジア百年の重女」(世界)がふれてるアジアに対する問題もそうだが、ここ十年くらいの間に日本人はなぜ日米戦争についてだけこれほどの免責意識を持っていたのでしょか。

橋川 国が違えば、同じ出来事がメタルの両面のように異なったものとして記憶され、人々の常識になることは必ずあります。真珠湾攻撃や原爆投下についても、このギャップが存在することをよく理解することが出発点だと思う。これまでの国内言論は原爆がどんなに悲惨だったかを日本国内の文脈で繰り返して反復することしかやってこなかった。ギャップは埋まるどころか、これでは原爆の悲惨さを訴えようとする人々が目指しているはずの目的すら達成できない。原爆が日本人にとってどうしてそうした「神聖な記憶」になったのかは究明を要する問題です。出来事自体の悲惨さは当事者には自明のことですが、これを国境を越えて伝達することは非常にむずかしい。

森 アジアの国々は戦争中の日本の行為を忘れないでいる。一方、東京大空襲にしても原爆にしても、戦後、日本がそういうかたちではアメリカに対して「悪意」を持たなかったことが不思議です。侵略国日本と占領国アメリカの違いなどもあります。

中西 原爆についてはともかく太平洋戦争については、アメリカにもアジアの国々にもそれが日本の侵略によって始まったもので、一九四五年八月十五日まで一つの物語であるというところにはかなりコンセンサスはある。それを理解せずに簡単に脱冷戦構造の中で日米戦争について免責意識を持つ昨今の議論は、日本の将来を考

えんと私は向こう見ずではないかと思えます。橋川 やるべきことをやらないというところが多過ぎる。一つは今度の被爆者援護法。本島さんと平岡敏さんの対談(被爆五十年を迎えて「世界」でも指摘されています)ですが、対象が日本人に限られている。戦争の当事者でもあった日本人と、日本政府の行政命令で無理やり連れてこられた朝鮮半島の人々や外国人の捕虜とでは、被害の補償や責任のあり方は全然違うはず。仮に当事者の日本人に補償しないことがあり得ても、外国人に補償しないなんてあり得ないはず。発想が反対なんです。もう一つは、真珠湾奇襲に際して通知が遅れたのが外務省の責任であることが外交文書の公表ではっきりしました。大日本帝国の正統な後継政府である日本政府がこの責任を引き受けるのなら、謝罪があつてしかるべきなのに、何もない。日本人は忘れっぽいけれど、世界の人はだれも忘れていない。これはバースタインさんも指摘しています。

後書き
今回は新進党結成や社会党の分裂騒ぎと動きが急になってきた政党再編成についての評論文を中心に話し合っていたいただきました。雑誌がどのように論じているか、何が足りないか、まで踏み込んでおろすと、たぐさんの文章に目を通していただきました。委員の方から「食傷気味」という発言が出たのは、「論」の入る余地のない政界話が多数を占めていたからですが、「改革」の風が吹いていた細川政権誕生前後と比べて大きく様変わりしています。当時は「改革」の内容をめぐって「論」が闘わされていたはず。いい意味で論者の情熱を感じさせる議論も多かったのですが、今ではその熱も冷めてしまったような今月の雑誌でした。現実政治への失望もあるかも知れませんが、揺れ動く過渡期である今こそ「論」の復活を期待したいと思えます。(雅)

「売れ筋」路線と歴史感覚

橋川 文藝春秋の「マルコポーロ」が廃刊になりました。問題になった2月号の「ナチ「ガス室」はなかった」は、間接情報に基づきはきしただけのもので、その間接情報にどういったバイアスが加わっているかにも無頓着な、レベルの低い文章です。そういう記事を面白い素材だとして雑誌に載せた編集部は、その方向を向いた「売れ筋」路線、そこに非常に深刻な問題があります。それが「マルコポーロ」だけの問題ではないところに危機感を覚えます。

森 言論の自由から言えば、いろいろな意見が載っていいのですが、載せるかどうかを決める判断と、載せた場合に責任を取ることも大事です。解任したからといって編集長を記者会見に出さないのはおかしいし、広告の圧力と国際問題になったからと、すべ廃刊にするのも安易です。文藝春秋としては、どこが間違っていたのか、どこが公正さを欠いていたのかを、公表していく責任があります。中西 論文は活字にできるようなレベルではない。

すこぶる問題のある企画でした。雑誌編集者がこれだけのいいのだと考へ、売れ筋を考えたこと背景には、日本人の「歴史の真実」に対する甘さがあるのではないのでしょうか。これは歴史の研究者として非常に気になることです。次元が違うかも知れませんが、日本特有の歴史小説というジャンルがありますね。文学としては大変優れているのですが、それを本場の歴史と峻別する知的土壌がこの国にはない。イデオロギーに引きずられた歴史学者が読者を得られなくなったことの反動で歴史小説が読まれるという側面もありますが、歴史小説を歴史と願ってしまうことが日本人の歴史感覚、国際社会に対する感覚を非常に狭いものにしていきます。

橋川 消費社会ですべてのものが商品になり、情報や記事も商品になります。商品価値を生むのは差異ですから、通説があれば反対する、常識があれば踏み破る、道徳があれば反道徳を装う、そういう作戦でメディアは生き残りをする。しかし、常識には常識の道理があり、それを覆さないのに常識の外に出られるわけがない。

後書き
大災害の場合、的確な情報を得られるかどうかが大問題ですが、特に指導的立場の人にとっては決定的です。今月のさまざまな記事からは首相公邸、官邸はじめ、中央、地方のトップ周辺の情報環境のお粗末さがよくわかりました。マルクメディア時代が叫ばれ、パソコンや学生が携帯電話やパソコン通信などを利用しているのが現代日本の情報空間ですが、皮肉なことに政治行政のトップ周辺にはまだ届いていないようです。山根一真さんが指摘された日米格差もあるのですが、ます国内の「一民」の格差を急いで是正する必要があります。なお、この欄がスタートした一昨年七月以来参加していただいた森まゆみさんは今回が最後になり、次回から女性史研究家の山下悦子さんに交代します。(雅)

「マルコポーロ」廃刊

橋川 国が違えば、同じ出来事がメタルの両面のように異なったものとして記憶され、人々の常識になることは必ずあります。真珠湾攻撃や原爆投下についても、このギャップが存在することをよく理解することが出発点だと思う。これまでの国内言論は原爆がどんなに悲惨だったかを日本国内の文脈で繰り返して反復することしかやってこなかった。ギャップは埋まるどころか、これでは原爆の悲惨さを訴えようとする人々が目指しているはずの目的すら達成できない。原爆が日本人にとってどうしてそうした「神聖な記憶」になったのかは究明を要する問題です。出来事自体の悲惨さは当事者には自明のことですが、これを国境を越えて伝達することは非常にむずかしい。

1995-7-18

高齢化社会の結婚観

年上女性 / 年下男性

山下 横綱貴乃花関が八歳年上の河野賢子さんと婚約し、テレビの人気ニュースキャスターの小宮悦子さんの結婚相手も九歳年下だったことで、女性週刊誌などに「年上の女性/年下の男性」というテーマの記事がたくさん出ています。統計的にも十五年前の二・七割が一九九三年に一六・一割と「年上妻」は確実に増加しています。戦前の女性解放の旗手平塚らいてうは大正時代に年下の男性と一緒にシャワーリズムを歌い、結婚したし、女性史研究家の高群逸枝もパートナーより年上でした。その時代に新しい生き方をした人が、そういう選択をしている。それが大衆化したということでしょうか、週刊誌の取り上げ方も肯定的です。小宮さんは、知名度も経済力もあって年齢にあまり関係ないかたちで華やかに活躍している。昔の男のようにそのうらみで目を見せたい、感じたい、むしろ価値を見いだすのは比較的若い世代の男性なのかなという気がします。

中西 私の中近東やギリシャの男性の友人はだいたい四十代半ばくらいで二十代前半の女性と結婚しています。世界的にも年上の女性との結婚がトレンドになっているところは多い。日本では、近代社会になってから移住者としての男性・家を守る女性という明治型男尊女卑の中で年上の男性と年下の女性の結婚が規範力のあるモデルになったと思う。それでも日本には年上女性との結婚についてのタブー意識が比較的多かった。それに加えて一九六〇年代以降に育った男性は、日本の近代化によって明治型男性の重しが軽くなって登場したように思います。

山下 男性たるもの妻子を養うべきだ、といった意識から自由になったということですね。

橋爪 各週刊誌などを見ると、小宮さんがやはり話題の中心ですね。戦後、結婚は本人同士合意でできるものになったけれど、男女の経済力の違いなどが微妙に反映して、当事者が合意してみたら男性が数歳年上というパターンが多かった。小宮さんのように年上の能力のある女性と年下で将来は未知数の男性の結婚があるにはある。

これも一つのパターンとして、これもあり、というふうには目立たなかった。ところが、特に職業を持った女性の場合、結婚年齢が上がるので年下の男性を対象にするケースも当然増えてくる。しかもそれがうまくいこうとすることが発見されたわけですね。それに、女性の方が長生きするので、女性が年下だと夫が死んだあと十年も二十年も一人で生きていかなければならない。それを避けようと思えば、女性が年上にシフトした方がいい、ということにみんな気がついた。こういうこともあって、年上の女性と年下の男性の結婚が一つのパターンとして認知されてきた。

中西 「女性自身」(3/21)によると「年上妻」の傾向はアメリカでも強くなっているそうです。「夫は妻より数歳上」がいいカップリングだ、という意識は、戦後進んだ大衆社会化と核家族化に関係しているように思う。

他人指向性の強い大衆社会の中で核家族が強いモデル性を持った。その傾向が行き着くところまで行かずに、後に流れが変わってきたのが七〇年代の末から八〇年代のアメリカ。その一つの方向は家族の崩壊だったかもしれない、同じ流れ

の中で「年上妻」も定着してきたのではないのでしょうか。この脱戦後的で他人指向性が弱まった、新しい大衆社会性が日本にも出てきている気がします。

山下 夫は会社勤めで妻は専業主婦かパートという今までの性別役割分業を土台にした結婚ならしなくてもいいと思える女性はいくつ多いと思う。こういう価値観の変化についていけるのは下の世代の男性なんですね。

橋爪 「日経ウーマン」の「結婚の『価値』は変わったか？」に載っている結婚相談会社アルトマンの調査では、大多数の男性は相変わらず自分より若い女性を伴侶に望んでいる。こういう現実がある以上、今の日本社会では女性が年下の男性の出現を待つのはリスクが伴うわけですね。

中西 この話題ではどの週刊誌も、女性と男性の平均寿命の差がこれだけ開いているから、これだけ年下の男性がいいという点にぶれている。「共に白髪」という古い結婚観と相手をたぐることを考えた高齢化社会に向けた結婚観が、見事にないまじりになっていくのが印象的でした。

後書き

「震災後の私たちは「震災前」とは確実に違った思考をしているに違いありません。たまたま冷戦が終わり、戦後五十年を迎えた日本は、政治経済社会の過渡期にある時、大震災の直撃に遭遇しました。メディアを通じて濃密に伝えられた大震災が日本人の意識にどういった影響を与えたのだろうか。そんな思いから、「震災後」をテーマに話していただきました。

最も話題になったのは橋本治さんの文章でした。強力な機動的な国家の必要性を説き、土地私権制限を主張するという、大胆な主張です。いわゆる「戦後民主主義」の良質な部分を代表していた橋本さんが、そんな主張をするところに、大震災の精神的影響の大きさを思いいます。

なお、今月から山下悦子さんが登場しました。「高群逸枝論」「マイケル・ハンク族」などの著書がある、新世代の「女性学」の旗手の一人です。(雅)

既成の枠組み再考を

「円高への視点

中西 円高が議論になっていますが、通貨当局の公式発言は別にしてドル安・円高傾向は長期にわたって続くと見方が共通しています。水谷研治さん(「あえて円高を歓迎する」文藝春秋ほか)、高橋聖宣さん(「特集・マネー暴走」エコノミスト4/18)、長谷川慶太郎さん(「ドル危機の本質」Voice)など、いずれもそういう見通しを語っている。また、円高という輸出企業を中心に「大変だ」と悲鳴をあげる議論が多かったのですが、今回はこの種の議論が少なくなった。

山下 「Voice」の水谷研治さんとの対談(強い円)もまた、(楽)の渡部昇一さんの発言が面白かった。円高という女性の就職難など暗い要素ばかり思いつかしますが、メリットを考えることも重要かもしれません。渡部さんは水谷さんの「ドルが安すぎる」という意見は政策当局と経済人の声」という発言を引き出して、生活実感的な意見を水谷さんにぶつけています。

橋爪 今回の円高のメカニズムを「Voice」の長谷川さんの論文がかなり

手際よくまとめています。円高がこれだけ高くなるので自動車などの輸出は確かに減る。しかし、日本が独自の供給している企業向けの製品、例えば自動車エンジンの線材や電子機器の液晶などは、たとえ価格がいくら上がっても海外の企業は日本から買わざるを得ない。そうすると円高になると自動的に貿易黒字が増え、またさらに円高が進行する。為替の変動によっても貿易黒字が修正されるに、状況もあるのです。ほかの国の製品と価格競争しなければならぬ分野の企業は急速に国際化を迫られる一方で、高付加価値の製品を持つ企業は日本に残っていい。そういう産業構造の変化が急速に起るといふ見取り図が描かれています。

伊藤元重さんの「バブル円高解消のシナリオ」(中央公論)は、今回の円高は経済の実態を反映していないバブルだとして、原因は貿易黒字の蓄積よりの海外投資の密着込みにあると見ます。そして、将来の円安を見越してしまつた資産を買っておこなう企業の利益になるし、円高の解消にもなるという見方です。政府には全く期待できな(Transparens)。

中西 冷戦期に発達した従来のマクロ経済学の考え方は、今回の円高も経済のファンダメンタルズを反映していない「不合理」なものというところになる。それは百五十円を割ったときにもいわれた。しかし、同じ議論の繰り返しが現状分析としても説得力がない。マクロ経済学の体系がある種の脱構築が迫られているのは、と素人としても感じる。ただ伊藤さんの議論が重要なのは、政府が何をできるか、経済上は限られていると論じている点です。今や通貨は国際政治でもあるわけだから、政府は何ができるのか、新しい発想で考え直さなければいけません。

山下 「大東亜共栄圏」という言葉も登場していますが、アジアについても同様で、戦前の「大東亜共栄圏」的発想は通用しないと思う。中西さんは「アジアか、アフリカか(Voice)で「アジアの時代」が来るのは、早くても二〇一〇年と書かれていますね。

中西 経済だけでなく、政治、文化も含めた展望として言っているわけですね。今のままでは、アジアにおける日本のプレゼンスはますます小さくなる。アジアの新しい発想は日本を通り越してもっと前へ前へと進んでいかなければいけません。

大震災、オウムに円高と政治の混乱を合わせて「四重苦」という表現もあります(ニューズウィーク4/26)。折しも戦後50年という節目の年ですが、私たちは自身の歴史を振り返り考えざるを得ない場所に、それを力づくで連れ戻された気がします。

このような時こそ、浮足たらず、冷静で腰を据えた雑誌の議論に期待したい、この思いも込めて、今月の座談会をお届けしました。(雅)

後書き

テレビの視聴率が軒並み新記録を塗り替え、夕刊紙、週刊誌が飛ぶように売られています。家でも職場でも酒場でも、だれもが皆、オウム評論家、サリン評論家、オウム論者、サリン評論家、オウム事件をめぐる一連の事態は、この一月の日本人の脳裏を覆い尽くしました。もちろん、海外の関心も強烈です。

無党派層と政治

中西 都知事に青島幸男さん、大阪府知事に横山ノックさんが当選して政治における無党派層の問題が論議されています。国政レベルの政治改革の議論と関連づけたいものが多いのですが、政治改革を今後どう進めるかにつなげた議論は少ない。無党派層自体を九〇年代政治の新しい波だとするとどうなるか、つかみにくい。無党派層を顕念化、理想化した、危険視したりして、無党派層を過大に考えている気がします。分りやすい解説としては、岩見隆夫さんの「青島・横山ブームの背景」(中央公論)があります。「諸君」では石原慎太郎さんが青島さんにエールを送っている(青島幸男君、国と闘え)。ちょっと意外な結びつきですが、今後の政治の動向を考える時に、こんなところヒントがあるのかなという気がします。

山下 「発言者」の特集では、佐伯啓思さんが反エリート主義とエリート主義の対立の中で反エリート主義が勝ったと分析して、エリートに対する大衆の反対の気分が政治的ニヒリズム

を生むことを危惧している。すが私はそうは思いません。石原さんは「正論」でも青島新都知事への期待と助言を語っています(私も期待する青島新都知事への助言)。一向に改革が進まない政治への絶望が一方であったうえで、官僚出身の石原信雄さんではなく、さらに大前研一さんでも岩國哲人さんでもなく、自前の表現力のある青島さんのキャラクターに期待すると言って、具体的な助言をしていて、好感が持てました。

橋川 西部選さんが「発言者」(無党派性、それは一人格なき人々)の被る仮面である。のほかに「文藝春秋」にも「愚民が愚者を選んだわけ」を書いていて、無党派は政治の放棄で、評価できないというのが西部さんのスタンスです。これは基本的に正しいと思う。岩見さんもほぼ同じ立場で、「テレビ型ポピュリズム」という言葉を使って過去の細川ブームや新自由クラブ、土井たか子ブームと同じ流れとして今回の青島・横山ブームを批判的に分析している。大前さんが実際に都知事選を戦った立場から、事前の投票予想は

選挙干渉であり、やり過ぎではないかと、マスメディアに注文を付けています(文藝春秋「青島知事を生んだ公選法七つの欠陥」)。特に夕刊紙はかなり無責任で、大阪ではノック危ういといった、まるで横山さんに当選してほしいような見出しまで使われたという。確かにメディアの在り方と無党派層の動向は密接不可分だと思えます。

中西 佐伯さんや西部さんの言う無党派傾向は本来の政治ではない、政党は政治にとって本質的なチャンネルだという議論は私も賛成です。ただ「青島さんはいじやない」といったおまじい拒否、お祭り感覚に結び付いた人格的な共感性なしに日本の政治が成り立つのか気になります。日本ではあれかこれかを一つのロジックで選ぶとか、機能的な政策論議に取れんせずに、むしろ政策論を向かうさんくさいものを感じる文化の土壌がある。無党派層の問題は「政治じゃないよ」と突き放して済まされるものではないと思います。

山下 無党派層はたまたま既成政党に対して支持できないという人々であって、今は過渡期なのだと思う。無党派と呼ぶことが自体私はいっぺいしませぬ。

中西 実体は政治改革の滅派です。「エゴニスト」(5/2、9)で蒲島郁夫さんが、細川内閣以降の不信感が今回の結果の背景だと指摘しています(細川以降への不信が新・無党派層のルーツだった。ただ、私は大前さんや岩國さんではなく青島さんが選択された背景には、政治を機能主義一点ばりに市場での競争原理的に考える政治改革論への否定があると思う。単に「細川」以後に幻滅しているだけではないだろうという気がします)。

橋川 「文藝春秋」の論文では西部さんは「無党派であって不安に思わない」ということは、政治の争点についての違和と政治家の人格についての無関心を意味する」と書いています。こいつの意味で私も無党派を評価しません。ただ、そういう人たちが大量に生まれ、その人たちの票が流れることによって青島さんが当選したことが一番責任があるのは政党です。政策で論争できず、相乗りと都合・おれじいによって金縛り状態になってしまった。人々はしようがなくて無党派となり、しようがなくて青島さんに投票した。その意味でこの現象は過渡期的であって、国政選挙に引き継がれないだろう。ブームと呼ぶべきでもないと思う。

後書き

オウム真理教をめぐる事態は二重の意味で日本社会の「鏡」になっているように思う。

まずこの事態そのものが日本人や社会を映し出しているという意味で。次にこの事態への反応の仕方が日本人や社会を映し出しているという意味で。この欄との関係で言えば、事態の解釈や対応策の論議の仕方、その質・量も含めて日本の「いま」を映し出していると言えます。総合誌のほとんどがオウム問題の特集をしています。が、中西輝政さんの指摘のように、文化的宗教的解釈論が多々対策論や制度論が少なかったことが特徴です。私たちがまずこの事態を理解することに全力をあげているということなのでしようが、私たちが自身でこの社会を築いていくという意識が弱いことを映し出しているのかもしれない。(雅)

科学者、警察、メディア

「オウム」と現代

橋川 オウム真理教事件について独自の観点から読み込んだ論文がいくつもありました。「中央公論」の米本昌平さん「再建せよ! 科学者の社会的責任を」は、科学者としての知的共同体が日本ではそもそも機能していなかったと指摘しています。オウム事件はその点に大きな警告を発したものだというスタンスで、共感を覚えました。

「諸君」の野田直雄さんの「オウムと『宗教の復興』」は、カルトを批判する場合に不可欠な正統な宗教が、そもそも日本にはなかった点が問題だといっています。オウム事件に衝撃を受けるだけではなく、正統的宗教がないのなら、それに代わる「骨太い保守主義の精神」を根本にすべきだといふ提言で、これも共感を持って読みました。吉見俊哉さんの「われわれ自身の中のオウム」(世界)は、今回の事件はメディアの中でメディアと結びついた関係を作らざるを得なかったの指摘で、教えられるところが多かった。

中西 「諸君」の加地伸行さんの「宗教教育が『怪力・乱神』を防ぐ」が、儒教の観点から戦後日本における宗教教育の欠如を問題にしています。野田さんの「骨太い保守主義」の内容も冷戦後の今日、分かれたくくってあり、その点では加地さんの日本的、儒教的な発想の重要性を説く議論の方が分かりやすい。田中良太さんの「空洞化を露呈した警察機構」(中央公論)は、松本サリン事件以後、地下鉄サリン事件までの間に有効な手が打てなかった「係長的発想」の現代警察の問題点を指摘しています。「諸君」の生田忠孝さんの「警察はオウムに勝ったか」も少し別の角度ですが、官僚機構としての警察を問題にしています。文藝春秋の「ドキュメント・誰も書かなかった公安警察」(浜口敏之&取材班)はドキュメントとしては面白く読みました。

米本さんの論文なども合わせて考えると、オウムの問題は戦後の日本、さらに近代日本にとっての大きな宿題を突き付けたものと思えます。つまり理科系の科学者が思想的・哲学的面を欠いたまま近代化政策に奉仕するだけの存在だ

った点、宗教教育の欠如、社会の安全にかかわる大きな組織犯罪への対応ができない、法制度の不備といった問題が浮き上がりました。

山下 「Ronza」の辺見庸さんの連載対談や「週刊金曜日」(6/2)に松本サリン事件で犯人扱いされた河野義行さんが登場して「インタビュー」に答えています。「お前が犯人だろう」といいたいやらせ電話が事件当初の二カ月間に百件もあったそうです。一度犯人扱いされてしまうと、今の日本のメディアのあり方の中で「犯人ではない」と証明することが不可能に近いものになってしまつ。情報が飛びかう現代社会の負の部分突き付けられるものとして読みました。犯人づくりに加担してしまつ、虚構のレッテル張りを取り上げたものが、ようやく出て来た感じがします。「週刊金曜日」(6/9)では、神保哲生さんの「オウム報道に情報操作はなかったか」を露呈した情報非公開社会・日本の危険性」も警察のリスク情報にすぎるとのメディアのあり方を問題にしています。

後書き

「日米安保」というテーマは一九六〇年の安保闘争などを知る人にとって懐かしい響きがあるはずですが、最近の「経済対立と日米同盟」という問題設定は隔世の感があるでしょう。榮綱、悲観と温度差はありますが、今回の各誌とも日米同盟を維持するために、その「危機」をどう回避するかで軌を一にしているのですから。かつての反安保の主張や運動の背景には、「軍事」と「同盟」を忌避する理想主義的な平和主義、反米ナショナリズム的な心情、連・中国など社会主義圏への親近感など様々な心情と理念がありました。しかし、冷戦末期までにはすっかり景色が変化し、「安保」も主要な争点としての地位を失って久しかったのです。

その忘れられたテーマが日米摩擦を機に再浮上したわけですが、イデオロギーを離れ、日本の国や国民の利益、世界の安定などの観点からの議論が主流を占めるようになった所に、「国内冷戦」が終わった効用を感じます。(雅)

文化 批評と表現

実現するか二大政党制

橋川 参院選の総括では二つの対照的な見方がありました。佐々木毅さんの「『市民と遊戯』の政治は終わった」(THIS IS 読者)は、新しい変化はあまのなかつたといひ、五百旗頭真さんの「日本政治に新しい潮流を見た」(潮)は、二大政党制を国民が選び取るという明確な潮流が見られるという。私は五百旗頭さんの分析に共感する部分が多かった。参院選と言え、自民党対新進党という対立の間に社会党が埋もれていくという流れがあり、第三勢力を国民は支持しようとしていないという分析です。

参院選と村山政権

中西 村山首相や社会党政権を間近に見ている山口二郎さんの「社会党は解散しリーダーは引退せよ」(Ronza)が面白かったです。政策研究会などで社会党の活力のよみがえりを訴えてきたにもかかわらず、社会党の古株の政治家が一向に自覚のない、とこのうです。四四・五二%と投票率が大幅低かったわけですが、佐々木さんは無党派層が大半にひびいて、日本政治の主人公という気力に非常に乏しいと指摘している。また、仮に投票率が六〇%になったときに、むしろ恐ろしいことが起るかと

安がヘースになって大津波が起きたら恐ろしいというのですが、これは鋭い指摘だと思えます。山下 五百旗頭さんの論文を読んで象徴的な議論だなという感じがしました。吉本隆明さんは井沢俊介さんによる「インタビュー」消費資本主義と日本の政治(「諸君」)で、青島ノックを選んだ選択は「無意識のうち」に『死』の方向からいまの社会を見てきたと述べていました。「老境」に入った日本社会を無意識に反映しており、無意味な感じがあるということですね。私は投票率が低いことも深刻に受け止めた方がいいと思うし、有権者としての意思表示を放棄してしまうのも問題だと思えます。青島さんやノックさんが出たころにはまだ無党派層の意思表示があったのかなと思つたんですが、今はもう少し深刻に受け止めた方がいいという気がしました。その点では悲観的な佐々木さんの論文の方が、私の感じに近い。中西 吉本さんは無党派層について興味深い分析をしています。「市民主義」と「市民の本音」との違いを分かつた無党派層現象を考へてはいけないう点。次に「小沢一郎時代」というのはもうすぐ飛びかかっています。

そののがこの無党派層現象という見方です。「すつ飛はされた小沢時代」との指摘は鋭いところをうつています。小沢氏の日本改造計画のような政策ミックスは今や古らという意識が広がっています。それが逆に反小沢で成り立っている自社さきが政権の活力も失わせてしまった。ナツメロとそれへの反対だけで政治の軸にしようというのではどうしようもない。山下 飯尾潤さんが「政治の世界に権力闘争を」(宝島30)で自民・新進の二大政党制を期待する発言をしていますが、ルーツ的には似たりよつたの政見ですか、今まで革新政党が果たしていた役割はどうなるんですか。中西 二大政党制というのは反対党から政権を奪取することだけを存在理由としている。そのためにあえて相手と違つたことを言つてアピールする。日本の倫理観には合いませんシステムです。まず政策の対立軸が必要だというのは二大政党制の基本を理解してない議論で、政策で分かれるのなら多党制になる。橋川 私も宝塚の月組・星組でいろいろ考え方をしています。でも政権交代がで

とが大切だ。五百旗頭さんは、労働組合は保守対立時代には革新支持だったが、産業構造が変わつて労働者だけで政党を支援しきれなくなれば各党のよりいっせいな部分の支持基盤の一つになるのを懸念している。橋川 それは政治の本能ですからそれでよいのです。その弊害を少なくするために、国民の意思が直接政権の選択に結び付く小選挙区制で二大政党制を機能させようとしています。中西 今は経済界も含めて責任をとりたくない指導者が多すぎたので、山下さんの心配も分かります。政治は最後は人間たことごとを忘れてはいけませんね。

後書き

毎月の大小二つのテーマは、月刊誌が出そろつた十日ごろに決めていきます。先月の「戦後五十年」のように、かなり前から予定してあるものもあります。今月の小テーマ「参院選と村山政権」も、実は一カ月前から大テーマで予定していたものでした。しかし、論議の素材になる論文が少ない上、もっと緊急のテーマ「中仏の核実験」が出てきたので、大テーマはどちらに譲ることにしました。最近、総合誌には政治についての論評が少なくなっていきます。大震災やオウム事件の陰に隠れて目立たないものもありますが、政治自身の停滞を反映しているのではありません。五五年体制崩壊が叫ばれた二年前の政治論議の迫力、熱気が今のようです。参院選後には論評が出そろつたと思うんですが意外に少なく、やはり世の関心が日本政治に向いていないことを改めて確認しました。(推)

文化 批評と表現

日米ともに新鮮な驚き

山下 大リーグでの野茂投手の活躍が話題です。ニューズウィーク(7/12)では野茂は表紙にもなつて、子供たちの間でも大変な関心事です。知り合ひの日系三世の人は「涙が出るほど」と興奮していました。週刊金曜日(7/14)でロサンゼルス在住の作家・米谷ふみ子さんが「野球嫌いも知る」モ・フィーバーを書いています。三十歳の作家の息子さん「野茂が日本野球界に対するアメリカ人の価値観を奪ってしまった」と言っているそうです。野茂は日本の球界の古い体質と合わずにアメリカにいったわけで、彼の活躍で日米球界のギャップも明らかになった。野茂は上の世代に反抗して自分の夢を実現したラッキーボーイだったという感じがします。

橋川 野球はアメリカンフットボール、バスケットとともにアメリカを代表するスポーツです。日本はそれを受け継いだわけですが、力の差は大きいとされてきた。選手との交流も日本からアメリカに行へることはなく、嫌み分けができていた。野茂の衝撃はこれを打ち破った。トルネード投法は体格以上の力を発揮する努力の結果で、しかも、フュークも彼にしか投げられな

種類のもの。その意味で優れた才能があった。私だったら仮に少々才能があつてもそれを試しに大リーグに行くことはちょっと躊躇する。過去の選手もそうだった。ところが、野茂は大リーグ行きを選んだ。アメリカはもと世界から人材を集めて成り立っている国家だったけれど、日本だけは一流の人材を送つてアメリカ文化に貢献する発想がなかった。そこに野茂のような人物が出てきたことでアメリカ側にもある種の安堵感があるんじゃないでしょうか。中西 文藝春秋の野茂と江夏との対談(君には大リーグがよく似合う)が面白かった。江夏も大リーグに挑戦した。私は江夏とほぼ同世代というところもあって、彼には対米コンプレックスがあつただろうと身がこたえて感じました。野茂世代はやはり私たちの世代とは違つた日米関係のイメージを持っていて、新しい感覚で世界の中で活躍している。さやややチャップマンの全英フィニッシュがありましたが、男子の松岡のベスト8入りは野茂が大リーグで大活躍するのと同じくらいに私には驚きでした。日本という国が変わりつつあると痛感しました。

週刊誌の記事では、野茂の活躍には捕手のピアザの存在が大きいといふことが書かれていたのが印象的でした(サンデー毎日7/23ほか)。私の経験でも、こういう国境を超えた人間のつながりは外国で仕事をするときには大変重要です。もちろん個人としてちゃんと行動できたり、ネアカであるという野茂自身の性格も大きいでしょうが、逆になんか感じたなと思つたのはあだん底底鉄の「人を見る目」(週刊読者)20)。どういふところに視線を向けていくに取材をするというところだ、日本的な古いムラ意識が感じられませんでした。山下 野茂が最初に大リーグにいったときには「スト破り」だと言われたり、また近鉄サイドからの批判もあつた記憶があります。そういふコンプレックスの中の活躍は立派です。野茂は清原や桑田のように高校時代から甲子園で活躍した「野球界のエリート」と呼ばれて選んで、反骨精神もあつたと思う。ドジャースは監督がイタリア人ですが、いろいろな国籍の人がいるというチーム環境もあつたのではないかと。

橋川 週刊ポスト(7/21)のインタビューが面白かった。個性について「結果が残れば個性的であつて結果が残らなければ個性じゃない」と言っています。自分のスタイルについて結果を含めて彼自身で責任を持っている。これは潔い姿勢です。「ナ・パスにならなかつたですか」という質問に「ナ・パスになるやつは最初からナ・パスに来ませんよ」と答えています。自分がどこに所属するかではな、自分はどこにいたなら一番力を発揮できるかを考えている。野球は大リーグが世界の標準です。同じことはビジネスの世界でも学問の世界にもあることだと思います。野茂が、ほかの分野で野茂のように行動できる人はどれくらいいるか。野球はルールが世界共通というところもありません。中西 確かに日本人が国際社会で活躍する姿として象徴的かもしれません。なるほどという人間ならアメリカの社会で才能を発揮できる人だと思えます。

後書き

ニューズウィーク日本版(7/26)のヒロシマ特集が印象的でした。被爆直後の写真に「ああ、我々は……何をしてしまったのか」という大きな見出し。原爆を投下したエンロ・ゲンの副操縦士の日記からの引用で、その道徳的苦悩が特集の核です。トルーマン大統領の投下決定までを検証した後で「身の毛もよだつ惨禍を引き換えた、この決定はおそらく多くの人命を救った」「世界はトルーマンのおかげで、原爆がいかに恐ろしい兵器かを自のあたりにした。あれ以来、この地球上で二度と核兵器が使われていないのはそのせいなのかもしれない」と締めくくっています。結論には賛成できませんが、米国誌自身の道徳的苦悩が見えるように好感が持てました。一方、聖教会で話題になった「ジュアル誌は対照的でした。ハルマゲドン待望のような「戦争への誘惑」、やたら屈高な「日本だけがなせ悪」。中身はタイトルほど過激ではないのですが、その「悪」が気になります。(推)

教育の危機への視点

「体罰死」を考える

橋爪 福岡県飯塚市の近畿大学付属女子高校で女生徒が教師の体罰で死亡した事件があって、これに直接ふれた論文や関連したものを読みました。しかし、雑誌レベルの言論はステレオタイプで、教育の場面で実際に起きていることや教員の日常感覚、生徒が感じている事柄に届いていないのではないかとこの感触がします。

山下 私はどうしても子どもを育てている母親として読んでしまうので客観的ではないかもしれませんが、宝島30(渥美京子「エイリアン」体罰教師、諏訪哲二「それでも体罰はなくなるなら」)と文藝春秋(同誌編集部「体罰教師へ——教員から80通の手紙」)が全く立場が違うのが印象的でした。文藝春秋は、本当は素晴らしい教師だったのだと語っています。教師が中心に構成してありますが、生徒にも問題があった。「先生の行動は間違っていない」といった死に至らせた教師の暴力を正当化する内容を掲載するのはいけません。宝島30の渥美さんは割に公正に両方を取材して書いていると思います。ただ、「口教師の会」の諏訪さんが男子高校生とちがって女子だ

と反撃される心配がないと言っているのは驚きです。これは教育における女性差別ではないでしょうか。渥美さんが書いていますが、被害者の親に無言電話やイヤスラ電話があることにもびっくりします。

中西 諏訪さんがイギリスのプリックスタールの例を挙げています。プリックスタールでも今はほとんど体罰は禁止ですが、容認されていたときも、立会人がいてムチとか棒とか決まったもので体罰をした。教師がそこで興奮していたことが法廷で立証されたら、それは私的暴力ということになりました。体罰がどうしても必要であるなら、それはどうした「管理された暴力」でなければなりません。諏訪さんが教師も人間だから体罰を加えるときは感情的になる、と語っているのは恐ろしいと思う。暴力に対する意識に非常に危険な思い込みがある。マスコミの議論も熱血教師の行き過ぎとか、現代の女子高校生の「乱れた風俗」といった情緒的なレベルでとどまったり、議論をまっせつかえすのではなく、問題解

決型の社会工学的な議論をしていへばいいと思います。

山下 女子高校生がピアスをしたりスカートをやっと短くすることがそんなに許せないことなのではないでしょうか。

中西 この学校が私立学校だったとしても大きいでしょう。しつこい厳しい学校という地元での評価の点で学校としての存在にもかかわる。そこには教育という制度、学校そのものが状況に対応できず立ちすくんでしまっている現状があります。その点では西尾幹二さんの「序列と格差の近代を懐疑せよ」(HIS 読売が文部省の存在や教育自由化についてどう考えるか)という点にまで立ち入って論じています。西尾さんは自由化論は教育の危機的状況に対する自己救済の叫びだと表現してしまいが、教育改革を自由化の問題として考えていくだけではまず不十分ではないかと思う。西尾さん自身の筆致にもそれが感じられます。

橋爪 ジャーナリズムは教育の危機について確固たるスタンスがありません。何か事件が起きると「良心的」なことを言われれば「ほげほげ」のコメントを文部省に支配されて、学校の現状を

知らないままに暴力教師だから体罰をしたのだろつなご安易なストーリーをこしらえて書いてしまうのが大体のパターンなのです。事件の衝撃に読者・視聴者がせつちかちかあり過ぎ、ゆっくり調べているひまがない。いじめにしても体罰にしても関係者に話を聞くのが非常に難しい事情もあるでしょう。しかし、まずよく調査をして事実に基づいて個別にストーリーを発見して書くべきなのです。せつちかちか良心は事態を悪くするだけです。

中西 諏訪さんが言っているように、生徒が学校という場所そのものを否定してしまうとき、もう学校としては対応のしようがない。学校が成り立つ文化的支えが揺らいでいる。それは日本の親たちの間にも表れている。この事件に関する週刊誌の記事を読んでもそういうことを感じます。

山下 小林篤さんの「清輝貫く自決の決算」(現代)は一つの「物語」として読めばいいでしょう。

橋爪 これは随分よく取材したものだと思いました。

後書き

社会党の新興問題と自民党の裁選が同時並行で進み、日本政にかかわる報道や評論が少し活を取り戻したようです。とはいえ、政治好きな総合誌でさえ、また集が組まれるほどではありま。そのような中で、Ronzeが社会党を応援する形で「第三特集」をしていたので、これが座の議論の中心になりました。社会党にとって「現実的な主義」というのは言い古された問題です。大ざっぱに言えば、野党民主主義の政権担当が可能な現実的プランが、威勢がいいが非現実的な社会主義路線に敗北してたのが同党の路線闘争の歴史だと思えます。その意味で「第三特集」特集の社説は古くさいトーンを聞き直しているように、が、中西さんが指摘する現代的意義も含まれているはず。しかし、新興論議を通じて、この党の生き残るべきか否か、この党が生きていくべきか否か、すれにしても次の総選挙で有権者が決めることとなります。(雅)

米兵の「暴行事件」

山下 沖縄の米兵の小学生暴行事件の背景は「週刊金曜日」10/6(6)の新屋敷先生たちの論文身の危険にさらされ続ける女性たち「4」の「ニエースワイク」10/4(4)の「ニエースワイク」の「破教」を併せて読むとよく分かります。奥底の米軍に対する種族的屈辱感や、男性の女性に対するレイプという問題への「わはは」の二重性を荷負った事件だと考えます。今までは沖縄の事情が本土に伝わらず、また日本のマスコミが女性の権利について鈍感だったから、今回の事件が全国規模で取り上げられたことを喜ぶべき米側は驚かざるを得ません。

中西 事件がひどい話だけに、本土でも安保体制に対する日本人の複雑な感情が露呈しました。「週刊文春」や「サンデー毎日」などはかなり感情的な事件報道をしていますが、安保体制はかまわれない。一方「週刊金曜日」は安保に関する論議を掲載し、「エッセイ」10/10(10)の「田岡さん」が米軍配備について解説しています。か、この問題はいくら扱っても足りない感じがします。これだけの経済大国なのに、七千

近い思いやりや予算を出して、なお旧安保と似たような地位協定しかしてないのかと頭がなはなは、湾岸戦争ショックと同じで、戦後日本の負の面を隠したくないわけですね。

山下 密合恵子さんが「週刊金曜日」で「最後の植民地」を引き、今回の事件を女性・子供という「植民地」への許し難い暴力でとらえています。

中西 日米安保の本質をなす「基地」の「合理的な」国際関係と「感情的な」切迫感との感情的問題が生じてしまった。橋爪 ます、冷静に対応する必要があります。反米感情の暴発は非常に危険な、オウム教団の中に反米感情がいろいろな形で蓄積していったのと同じです。地位協定をめぐる議論では、容疑兵士の取り調べ期間中に日本側が身柄拘束できないのが問題とされてきましたが、これはよく考えると微妙な問題です。日本のいわゆる進歩派は、取り調べ段階で被疑者の身柄を警察の留置場に拘束するのはよくないと言っています。これが、今度はその逆を主張するところになり

かねないからです。もともと現在の地位協定の背後には、アメリカが日本の司法や捜査を信頼できなかった状況があったわけで、協定改定を求めたのは、その辺もよくわかった議論をいかにいかに必要です。

中西 田岡さんは基地外の犯罪には英警察が全権限をもち英国の場合を紹介しています。日本には安保法だ乗のコンプレックスがある、その辺を言っている人がいますが、日米も成熟した民主主義国同士で米英型の関係を求めようとする必要はないでしょう。

橋爪 「ニエースワイク」10/16(16)の「アメリカの米安保不要派と必要派の対立」が面白いです。必要派は日本の安保法を批判してはいるものの、一方必要派は安保をなくしたら日本は武装する、反論をしていいます。強いの日本軍備増強を容認するか否かという点で、他はよくわかっていて、対米の反安保論は一種の「リベラリズム」です。安保がなくなると核武装再準備へ過剰に振られてしまつてそれが

国民の権利意識が向上している今のアジアの姿をアメリカはちゃんと感じ取っている。だから「ニエースワイク」の記事は、今回の事件がコンプレックスとか反米感情とかいう問題ではなく、当然の権利意識がめくれた人間が当然の要求をしているのだととらえている。それを感情的に利用して改定を押し出すような政治家は困る。その点「ニエースワイク」が「米兵はマナー講座を真剣に受けた方がよかったです」という現実的では無いかもしれませんが、これは救われます。

中西 制度疲労の問題がありますね。制度を取りまく個人の意識が三十年前とはまるで変わっている。日本政府の対米対応は戦後のな情性にかかっている問題をずっと持ち越してきたままです。国家には戦略的かつ個人、個人個人の感性からかけはなれた動機にそった世界があります。しかし、ローバル・グローバル的感覚をもつ現代の大衆にとり、安保とか戦略とか問題とかいうのは除外された論理と映る。そのギャップをどう埋めるか、難しい問題です。

後書き

米兵による少女暴行事件について今月号の各誌は間に合っていない感じが、事態が急展開している中でサブテーマで取り上げました。日米安保体制については、国民の多くが支持しています。とはいっても、他に現実的な安保政策の選択肢がないという消極的理由による支持が多いのではないのでしょうか。沖縄県知事が土地強制使用の代理署名に拒否したことで、大きな政治問題に発展しました。日米安保が国民全体の利益になるのであれば、なせ沖縄だけ過大な負担をしなければならぬのか、という問いも当然でしょう。

中西さんが指摘するように、日本人の日米安保に対する感情は複雑です。すでに一部のメディアからは反米ナショナリズム的な論議が噴出しはじめています。しかし、感情的な議論は逆に問題をこぼし、危険があるのだから、冷静な議論が必要でしょう。来月号の各誌の論議に期待したいと思います。(雅)

1995年(平成7年)10月24日(火曜日) 毎日新聞 (夕刊) 2版

